



神奈川県東ロータリークラブ

KANAGAWA EAST ROTARY CLUB

DISTRICT 2590/CHARTERED MAY 29-1976/WEEKLY BULLETIN

2010-2011年度 R I 会長 レイ・クリンギンスミス



地域を育み、大陸をつなぐ

2010-2011年度 第2590地区ガバナー 川野 正久

- | | | | |
|-----------|-------|-----------|--------|
| ● 会長 | 横山 範夫 | ● 会長エレクト | 加藤 仁昭 |
| ● 副会長 | 渡邊 淳 | ● 副会長 | 月山 勇 |
| ● 幹事 | 飯田 泰之 | ● 副幹事 | 天野 公史 |
| ● 会計 | 朝日 達夫 | ● 副会計 | 田口 健太郎 |
| ● S A A | 伊澤 政宏 | ● 副 S A A | 小池 将夫 |
| ● 副 S A A | 山本 芳弘 | ● クラブ会報 | 金森 欣一 |

●クラブテーマ「コミュニケーション」●



- 事務局** ホテルキャメロットジャパン内 〒220-0004 横浜市西区北幸 1-11-3
TEL: 045-314-3900 FAX: 045-314-3555
- 例会日** 毎週金曜日 0:30 ~ 1:30 PM (第5金曜日 6:00 PM)
- 例会場** ホテルキャメロットジャパン **創立記念日** 昭和51年5月29日
- URL** <http://www.kanagawahigashi.com/>
- E-mail** kerc@beach.ocn.ne.jp

2010-2011年度 第23号週報 No. 1677 2010年(平成22年)12月17日 第1677回例会記録 12月26日発行

司会 天野 公史 副幹事

点鐘 横山 範夫 会長

斉唱 「それでこそロータリー」

四つのテスト 江森 国一 職業奉仕委員長
(第1例会のみ)

ゲスト紹介 渡部 陽一 様 (ゲストスピーカー)

ビジター紹介 横浜西RC 浅見 秀一 様

会長報告

- 12月度定例理事会報告

幹事報告

- 次週12/24(金)は12/26(日)年忘れ家族会に移動例会となります。12/31(金)は休会、年始は1/7(金)が第一例会となります。
- 事務局の年末年始のお休みは、12/28~1/3までとさせていただきます。
- 米山寄付金普通寄付の確定申告書が届いておりますので、ボックスへ配布致しました。申告の際に税務署へ提出をお願い致します。また、特別寄付の確定申告書につきましては1月に配布予定です。
- 2009-10年度第2590地区の年次報告書が届いておりますので回覧致します。
- 地区より「ロータリー活動の広報ステッカーの貼付プロジェクト」の協力依頼が来ております。本日、広報ステッカーを6枚ずつ、会員ボックスへ配布致しました。一般の方々の目に届く場所に貼付頂き、ロータリーの活動をアピール願います。

本日〈12月26日〉のプログラム

「年忘れ家族会」

委員会報告

広報・IT委員会 委員長 田中龍太郎

皆さん、当クラブのホームページはご覧になっていますか？

この度、会員専用ページ『Members Salon』をアップ致しました。

只今、江森会員から頂いた記事を掲載しておりますので、ご覧になってみて下さい。

また、会員皆様からの記事を随時募集しておりますので、掲載して欲しい記事、写真等がございましたら事務局までお願い致します。

白鳥厚夫君 渡部陽一様、卓話ありがとうございます。息子が大ファンです。

伊澤政宏君 渡部陽一様、本日、卓話楽しみにしています。よろしくお願い致します。

12月17日	14件	30,000円
本年度累計		1,150,600円

出席報告

森永 健 委員長

会員総数	56名	(41+15)名	
出席会員数	43名	(34+9)名	
出席率	86.00%		
ゲスト	1名	ビジター	1名
前回補正後	92.45%	前々回補正後	92.16%

卓話

「戦争という日常」

戦場カメラマン 渡部 陽一 様
(紹介者 須永 久一 会員)



私、渡部陽一が戦場カメラマンになったきっかけをお伝え致します。

「最初はただピグミー族に会いたかった。」

大学一年生の折、生物学の講義でいまだ狩猟生活をおくる人たちがアフリカ中央部にいることを知りました。その部族はピグミー族(ムブティ族)と呼ばれ、平均身長150cmほどの小柄な人達で、上半身裸、弓矢や槍を持ちワニやサルを捕りながら生活をしているということでした。想像を越えるピグミーの話に強烈に引き込まれました。

自分自身でピグミー族に会って話をしてみよう、この目で彼らの存在を確かめてみたい、早速気の赴くままにアフリカへ向かう準備を始めました。そこには取材者という気概は無く、旅行者としてピグミー族のもとへ出向くつもりでした。もちろんカメラマンとしての経験、技量はゼロ、全くの素人そのものでの出発です。当時、戦場カメラマンになろうという思いは脳裏にはありません。ただカメラで撮影することには興味があり、家族や友人を被写体にすることが時折ある程度でした。

スマイルボックス

伊澤 政宏 SAA

横浜西RC 浅見秀一様

本日は宜しくお願いします。

富居利貞君 先日、矢野さんの断髪式で鉄を入れさせてもらいました。

横山範夫君 ①渡部陽一様、お忙しい中卓話お引受け頂き、誠にありがとうございます。楽しみにしています。②聴講の皆様、ようこそおいで頂き、ありがとうございます。

月山 勇君 河野さん、先日は貴重な御品をありがとうございました。

山本 登君 “花粉” ひどくなって来ました。

河野明光君 渡部陽一さん、本日は当クラブへようこそ。楽しみにしていました。

飯田泰之君 渡部陽一様、ようこそいらっしゃいました。卓話、楽しみにしております。

伊東英紀君 田邊さん、先日はありがとうございました。

須永久一君 本日の卓話者、渡部陽一君、よろしく願い致します。

天野公史君 ①山本先生、本田先生の件につきましては色々お手数をお掛け致しました。お蔭を持ちまして、講話して頂けることになりました。ありがとうございます。②毎々、飲み会の続いている皆さん、ご自愛下さい。

脇田いずゞさん ①渡部様、ようこそいらっしゃいました。②赤堀さん、一昨日は大変ご馳走になり、すみませんでした。飲みましたね～。

茂木知子さん 矢野さん、丸裸のニワトリ、ありがとうございました。送り主と同じく、ニワトリも断髪(毛)してありました。

「ヒッチハイクでジャングル横断。」

パスポートを取得し、アルバイトで貯めたお金を持ってアフリカのザイール（現在のコンゴ民主共和国）のジャングルへ飛び込んでいきました。当時は外国を旅することも手探りの状態であり、ましてジャングルで生きのびる為の技術はありません。無知の功罪、まさにその言葉通りで、無謀極まる旅であったと思います。

ピグミー族の住む地域に辿り着くまでは、ジャングルの中で約2ヶ月の行程をかけなければならず、徒歩、カヌー、そしてジャングルを抜けるトラックにヒッチハイクさせてもらいながら、ピグミー族が住む森を目指して奥へ奥へと入り込んで行きました。

ジャングルの中は高さ20m以上の大木が生い茂っていて、太陽の光が足下に届かないほどに木々が覆いかぶさっていました。そこでは方角もわからなくなり、食糧も水も尽きてしまいました。すぐには方角もわからなくなり、食糧も水も尽きてしまいました。すぐにジャングルを一人で越えていくことは自殺行為そのものであると気がつきます。それ故、偶然出くわしたトラックに乗せてもらいながらジャングルを横断して行きます。「ピグミー族に会うために日本からやってきました。彼らの住む森まで乗せて頂けないでしょうか？」運転手は笑顔で僕をピックアップしてくれました。

トラックには運転手とナビゲーター、さらに彼らの家族、途中まで同行する現地の若い男女が乗っていました。日本でいうダンプカーのようなドイツ製のトラックで、荷台にはたくさんの塩魚が積まれていました。そのトラックに乗りこんで約2ヶ月、彼らと共同生活をしながら旅を続けました。日中にトラックで移動して、夜はジャングルの中で野宿する日々、ジャングルの路は舗装などされているはずもなく、ぬかるみと巨大なクレーターのような穴に至る所にあいていて、トラックの進むスピードは歩いた方が早い程度のものでした。あまりにも進みが遅いので、先のことは一切考えないようにして日々の苦しみを乗りきりました。そして何の前ぶれもなく、ある事件に遭遇します。

「突然の銃撃。少年ゲリラとの遭遇。」

トラックが突き進む前方の森の中から、突然十数人の少年たちが現れました。目を凝らしてみると少年たちはAK-47カラシニコフという銃を抱えています。さらに槍や鉈をもって裸の上半身には帯状の弾倉の弾を何重にも巻き付けて、こちらに向かって怒声をあげていました。

トラックの運転手が「伏せろ！」と叫んだ瞬間、少年たちが突然、銃を乱射して来ました。トラックに銃弾が何発もあたり、耳元を金属音が飛び交っていく。少年たちが銃を撃ちながらこちらに向かってくることに震え上がりました。その瞬間、死の恐怖に襲われトラックから転げ落ち、そのまま失禁、赤ん坊の様に地べたを這いずりながら、トラックの後部へ無意識のうちに逃げようとしていました。ただ体が恐怖で動かず、逃げる事が出来ず。少年たちがこちらに無表情のまま近づいて来ました。彼らは少年ゲリラ兵。1993年当時、ツチ族・フツ族の衝突によるルワンダ内戦がアフリカ中東部のブルンジ、ザイールを巻き込んで拡大していました。ジェノサイドと呼ばれる民族大量虐殺が発生、100万人以上の民間人が犠牲となり、国連の介入もその効力は皆無に等しいものでした。アフリカの情勢が激しく動いているその最中、情報も持たずに現場に飛び込んでしまったことでツチ族・フツ族紛争の最前線にかち合ってしまったこと、自らの無知を悔いても既に手遅れでした。

少年兵たちは、私たちを取り囲み銃尻で撲り続けました。立ち上がれないほどに打ちのめされました。トラックの積荷の塩魚は奪われ、自分の荷物・カメラ機材も略奪されました。ただ運が良かったのは、こちらから現金を差し出したことで、殺されずにすんだことでした。命を奪われなかったことは幸運以外のなにものでもありません。

アフリカでの少年ゲリラの蛮行。ここでは連日至極当たり前にこうした事件が起こっていました。日本からかけ離れたアフリカの森の中で理不尽な行いが繰り返されている。恐怖と怒りに震えながら、この状況を伝えることが出来ないか、その方法を模索することとなりました。

「職業としての戦場カメラマン。」

失意の念での帰国、その恐怖と怒りの感覚を引きずる日々が続きました。家族や友人に言葉で少年兵のことを伝えようとしても全く理解されることはありませんでした。あまりにも日本での生活とアフリカでの事件がかけ離れた位置にあり、認識出来るほうが逆におかしいという状況でした。

素直に言葉で伝わらないのであれば、好きな写真を使って伝えることは出来ないか、カメラを手にして現場に赴き、自ら見たものを撮影して写真を持ち帰り、一枚の写真の力で状況を伝えることが出来るのではと考えました。そして写真の力にすべてをかけてみようと思いを決めました。

その後、再びアフリカ、ザイールに戻ります。そこではピグミー族はもちろん、その地で勃発しているルワンダ内戦の状況を写真に押さえていくことに集中しました。病気や怪我の予防、現地での情報収集、同じ過ちを犯さないよう万全の準備を重ねての初取材となりました。

この時から私は戦場カメラマンとして世界を飛びまわることになります。ルワンダ内戦、ユーゴスラビア・コソボ紛争、イラク戦争、アフガニスタン紛争、コロンビア内戦、パレスティナ紛争、スーダンダルフール紛争など学生という立場でありながら、世界中の戦場、情勢が不安定な地域、災害地を飛び回るようになりました。そして写真を新聞社や雑誌社に売り、その資金で再び戦取材に飛び出していく流れが出来上がっていきました。





会員外聴講者席



横山会長より卓話のお礼



会場内



◎次週12月31日は休会

次々週《1月7日》の卓話予定

新年挨拶

会長、副会長、幹事、会計